

# スコット・フィッツジェラルドの プリンストン時代再考

内田 勉

F.スコット・フィッツジェラルドの生誕百年に当たる1996年にはフィッツジェラルド関係の書が常よりも多く出版されたが、その中でも、文学研究の根本資料という意味で最も重要なものは、Matthew J. Bruccoli編による *Fie! Fie! Fi-Fi!* と Chip Deffaa の編集した *F. Scott Fitzgerald: The Princeton Years Selected Writings 1914-1920* の二書であろう。前者は、フィッツジェラルドがプリンストン大学の学生劇団 Triangle Club のミュージカル・コメディの台本として書いたものが以来82年を経て始めて上梓されたものであるが、その詳細は既に論じたことがあるので、本論の内容に直接関係しない部分についてはここでは触れない。<sup>(1)</sup> 後者は、プリンストンの学生が編集・発行する二種の雑誌 *Princeton Tiger* (以下 *Tiger*) と *The Nassau Literary Magazine* (以下 *Nassau Lit*) に掲載されたフィッツジェラルド作品の全てを網羅的に集めたもので、Bruccoli と Jackson R. Bryer の編集した *F. Scott Fitzgerald: In His Own Time* (以下 *In His Own Time*) の中には収録されなかった作品も多く含まれ、また、*In His Own Time* の中で意

---

(1) 内田 勉 「F. Scott Fitzgerald の Fie! Fie! Fi-Fi! について」『電気通信大学紀要』第9巻 第2号(1996年12月) pp. 57-62.

図的に作品内容の一部が削除されたところを初めて復元し、隠蔽されたフィッツジェラルドの一面に光を当てたという意味でも価値の高いものである。<sup>(2)</sup>

- (2) *In His Own Time*の中で意図的に削除された箇所(p. 92)というのは *Princeton Tiger* (March 17, 1917)に掲載された“Kenilworth Socialism”と題されるイラストの説明文である。プリンストン大学における eating club という制度(本文参照)が平等の精神に悖るという理由でフィッツジェラルドの在学中に反対運動が起きた。イラストはこの反対運動を揶揄するもので、7人の学生(当時は全て白人)が平等主義の精神で、天秤の置いてある食卓に横一列に座り、傍に立っている黒人ウェーターが食べ物物を指しで計量している場面を表しており、FitzgeraldとJackmanの署名がある。削除された説明文は、「8番目のメンバーがマッシュポテトを計っている」(Deffaa, p. 105)というものでフィッツジェラルドによって書かれた。つまり、反対運動をやっている連中の言っていることは、結局黒人と一緒に同じ物を食えということだ、というメッセージであり、説明文がないとイラストのポイントは不明になる。削除の理由は明白で、アメリカを代表する作家として高い評価を得るようになったフィッツジェラルドに黒人差別主義者という烙印を押すことを避けたのである。*In His Own Time*はイラストの説明文を削除しただけではなく、やはりフィッツジェラルドのアイデアに基づくと伝えられる“True Democracy”と題された、黒人と白人が同等の立場で握手をしているもう一つのイラストを同ページに載せているため、黒人差別主義者とはむしろ正反対の作家のイメージを喚起する。編者にも言い分はあるのかもしれない。この二つのイラストは元々 *Tiger* の同じ号に掲載されたものだから、同じページに再録した、と。しかし、フィッツジェラルドにおける黒人差別と反黒人差別とが同時に示された矛盾に答えなければならない責任を回避したままである。この削除の件は私も今回初めて知ったが、私にとっては意外ではない。Bruccoliが、フィッツジェラルドの短編小説でまだ書物の形で刊行されていないもの全てを集めて*The Price Was High: The Last Uncollected Stories of F. Scott Fitzgerald* を出版しようとした時、当時ただ一人の著作権者Francis Scott Fitzgerald Smith(フィッツジェラルドの一人娘で通称スコティー)の同意が得られず、質が劣るという理由で8編の作品が除外され、更に、収録されたものでも2作品において一部削除がなされた。私はこの8編と一部削除された2作品の初出オリジナル版を入手して読んだところ、いくつかのケースで人種差別と関係していることが分かった。一部削除の部分に限って言えば、人種差別に関する言説を隠蔽することが目的であったことは明白である。当時、スコティーは民主党の党員で、反人種差別運動の活発なメンバーであった。党大会等で演説する時は、決まって、あのフィッツジェラルドの娘という形で紹介された。彼女がフィッツジェラルドの作品の一部について公にすることを執拗に拒否し続けた動機には、父親のイメージダウンを避けたいという娘としての真情もあったろうが、何よりも彼女の政治活動上の利害と結びついていたと私は考えている。*In His Own Time*の編者もスコティーの承諾無しには刊行できなかったのであり、削除は彼女の介入の結果と考えるのが自然である。フィッツジェラルドと人種差別という問題は彼の文学を扱う時に避けては通れない。フィッツジェラルド作品に描かれる黒人像は決して一様ではなく、後期において変容する。これについては稿を改めて論じたい。

フィッツジェラルドのプリンストン時代の作品研究は、これまでは、彼の習作時代の文学作品を初めて収録して解説を付した John Kuehl の先駆的な研究書である *The Apprentice Fiction of F. Scott Fitzgerald* と上記 *In His Own Time* との二書のみを基本資料として行わざるを得なかった、というのが実情であろう。原資料に直接当たることは不可能ではないにせよ、*Tiger* に掲載されたフィッツジェラルド作と見なされているものの殆どが無署名であり、*Nassau Lit* に発表された作品でも一部は無署名であるという事実を考えれば、上記二書に依拠せずに、プリンストン時代におけるフィッツジェラルドの文学を研究することは凡そ現実的ではない。従って、この二書の限界が、結局は、習作時代のフィッツジェラルド文学研究の限界になっていたと言ってよいであろう。Deffaa 編フィッツジェラルド作品集は、こうした限界を乗り越える研究を可能にするものであり、Kuehl によって言わば定説化された、プリンストン時代におけるフィッツジェラルド文学の発展過程の解釈に修正を迫る内容を持っている。以上のような問題意識で Deffaa 編を活用しながら、プリンストン大学時代におけるフィッツジェラルドの文学活動の実態と、それがフィッツジェラルド文学全体の中でどういう意義を持つか、その見直しを試みるのが本論の目的である。

Kuehl は、プリンストン在学時におけるフィッツジェラルドの創作活動の展開について、その特色を概ね次のように述べる。フィッツジェラルドのプリンストン時代は、彼が成績不振の故に 3 年次で停学処分を受けた 1915 年 12 月から翌 16 年 9 月までの期間を挟みその前後の二期に区分することが出来、前期における創作活動は Triangle Club 公演用の台本及び歌詞の提供が中心で、短編小説はただ一作しか発表していないのに対し、停学解除後の創作は短編小説の執筆が中心で、学生劇団へは僅か一演目に歌詞を提供したのみである。<sup>(3)</sup> この対比を際立たせるように、Kuehl は更に、フィッツジェラルド研究の草分けの一人である Henry Dan Piper を

(3) John Kuehl, *The Apprentice Fiction of F. Scott Fitzgerald*, p. 65.

引用する。「(停学解除後にプリンストンに戻った) フィッツジェラルドは、Triangle Club や *Tiger* に寄稿する代わりに、より真面目な文芸誌 *the Nassau Literary Magazine* にますます心が向かうようになった。」<sup>(4)</sup>

今世紀初頭のアメリカ中産階級に特に強く抱かれた「成功の夢」こそは、フィッツジェラルドの少年期から彼を最も深い所で突き動かし、彼の行動を常に方向付けた最大の要因であるが、その典型は、東部の名門大学(特に、ハーバード、エール、プリンストン)に入学し、まず学内で成功を収め、将来への確たる地歩を築き上げることである。中でも、最もポピュラーなのがアメフトの花形選手になることであるから、体格的にも、運動能力においても凡そフットボールに不向きであったフィッツジェラルドが、プリンストンの入試合格直後に母親宛に「合格。フットボールのパッドと靴を送れ」<sup>(5)</sup> という電報を打ったことに不思議は無い。フットボールのスターになる夢は入学早々に挫折するが、フィッツジェラルドがプリンストン大学を志望したもう一つの、と言うよりは、より本質的な動機であったトライアングル・クラブへの関心は、フットボール選手への道が閉ざされただけに、それだけより強烈に一極集中的に増大する。<sup>(6)</sup>以降、フィッツジェラルドは彼の唯一の天稟である文才のみを武器に成功への足掛かりを築く試みを続けることになるが、その最初の一步がトライアングル・クラブ恒例のクリスマス公演用の台本のコンペに参加することであり、1914年9月にフィッツジェラルドは栄冠を見事に手にするのである。これは、やがては作家になるべき人が学生時代に創作部門において最初の目覚しい成功を収めたという次元にとどまる事柄ではない。なぜな

(4) *Loc. cit.* 日本語への訳出は以下全て引用者自身による。

(5) *The Romantic Egoists*, p. 20.

(6) フィッツジェラルドがNewman Schoolの最終学年の時に偶然、トライアングル・クラブの演目の総譜を見てプリンストン志望を決めるエピソードは、Brucoli編 *Fie! Fie! Fi-Fi!* の Introduction における注にあるように、“Who’s Who—and Why,” *Saturday Evening Post* (18 September, 1920)に記されている。しかし、我々がフィッツジェラルドのこのエッセイを今日直接読めるのは、Arthur Mizener編 *Afternoon of an Author*(pp. 83-86)においてである。

ら、フィッツジェラルドの創作活動は、習作時代も含めて、彼にとってより本質的な社会的成功という目的と常に深く結びついていたからである。

プリンストン大学には、アメリカの大学に通常ある *fraternity* は存在しないが、その代わりに、実質的に同様な機能を果たす *eating club* がある。当時 18 あった *eating club* は序列化されており、その中でトップ・エリートと目されていたのは、“*Ivy, Cottage, Tiger Inn, Cap and Gown*”<sup>(7)</sup> である。2 年次の春に各クラブへの所属が決まるが、25パーセントの学生はいずれのクラブにも入れない。この時点で、プリンストン大学に同時に入学した全学生の格付けが定まるのである。クラブのメンバーに選ばれる要因は、スポーツや学業成績、或いは、出身校、親の社会的身分等、様々であるが、フィッツジェラルドはどれをとっても有利な条件にはなかった。「文学青年が集まるクラブは *Quadrangle* で、」<sup>(8)</sup> フィッツジェラルドの大的親友であり、彼に本物の詩の手ほどきをしてくれた *John Peale Bishop* もこのクラブに入った。しかし、フィッツジェラルドが目指したクラブはトップに位置する *Cottage* (正式の名称は *Princeton University Cottage Club*) であった。一見、無理筋に思える志望だが、彼にはそれなりの自信があったはずである。トライアングル・クラブの 1914 年のクリスマス公演用にフィッツジェラルド作の *Fie! Fie! Fi-Fi!* が選ばれてから、この学生劇団にとってフィッツジェラルドは急速に注目すべき存在になっていた。フィッツジェラルド自身は、この年秋に行われた座標幾何学の追試験に不合格であったため、大学当局に課外活動を禁止され、クリスマス公演に直接参加することは出来なかったが、劇団への彼の貢献は、翌 1915 年 2 月に劇団の副会長 (*secretary*) に選出されるという形で報われた。フィッツジェラルド自身の生活記録である *Ledger* のこの月の項には “...*Westover. Secretary of Δ Club on 26<sup>th</sup>. My sense of perfection. If I couldn't be perfect I*

(7) Matthew J. Bruccoli, *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*, Revised Edition, p. 61.

(8) *Ibid.*, p. 64.

wouldn't be anything.”<sup>(9)</sup>と記されているが、フィッツジェラルドが*Ledger*に日付をわざわざ書き入れるのは極めて稀なことであり、副会長に選ばれたことが彼にとって如何に大きな意味を持っていたかが窺えるのである。Westoverに意中の人 Ginevra King に会いに行ったことよりも重要であったことを示唆するという読み方すら可能だろう。トライアングル・クラブの副会長に選出されたということは、「彼が4年生になった時、まず確実に会長 (president) になることを意味したのである。」<sup>(10)</sup> フィッツジェラルドが、念願の社会的成功を達成しつつあると得意満面になったとしてもいささかも不思議ではない。*Ledger*に記されている perfect 云々の個所はこの時のフィッツジェラルドの自信の程をあらわしていると読み取れよう。時期も幸いした。各クラブからの正式な勧誘が始まるのが丁度この時期なのである。学生劇団の会長含みの副会長に選出されたばかりの注目株・成長株フィッツジェラルドが、翌3月に、最高位のクラブ二つを含む四つのクラブから勧誘を受けるのは不思議ではない。その中には Cottage も含まれるが、これはむしろ当然といえよう。なぜなら、トライアングル・クラブの当時の会長 Walker Ellis は同時に Cottage の長でもあったのである。

ところで、*Fie! Fie! Fi-Fi!* を演目としたクリスマス公演の大成功の榮譽を Walker Ellis が横取りしようとした形跡が指摘されている。<sup>(11)</sup> 物証がある。フィッツジェラルドが所持していたこの時の公演用プログラムのことであるが、*Fie! Fie! Fi-Fi!* の著者が Walker M. Ellis と印刷されている個所にフィッツジェラルド自身の手で墨が入れられ、改訂者と修正された上に、作詞 F. Scott Fitzgerald となっている個所には「プラス著者」と書き加えられている。<sup>(12)</sup> *Fie! Fie! Fi-Fi!* のリハーサルの際に、Ellis が台本に

---

(9) *Ledger*, p. 169.

(10) Bruccoli, *Some Sort of Epic Grandeur*, p. 64.

(11) F. Scott Fitzgerald, *Fie! Fie! Fi-Fi!*, ed. Matthew J. Bruccoli, p. viii-ix.

(12) この現物は現在プリンストン大学図書館に所蔵されているが、そのコピーが上記 p. ix に掲載されている。

手を入れたことはフィッツジェラルドも認めているように事実であろうが、このミュージカル・コメディのプロット、台詞、歌詞の全てを書いたのはフィッツジェラルドであり、それを Ellis 作とし、公演後の賞賛を殆ど独り占めした Ellis の行動は非難に値するものと言わねばならない。<sup>(13)</sup>しかし、フィッツジェラルドとしては、言わば Ellis に貸しを作ったことになり、これが、前述したトライアングル・クラブの副会長選出、続いて Cottage のメンバーに選ばれるという榮譽に浴することにプラスしなかったとしたらむしろ不自然である。

1915 年の春、プリンストン大学 2 年次後期課程の前半は、フィッツジェラルドは得意の絶頂にあった。この年の初めに会って以来彼の心を魅了する美貌と富に恵まれた理想の女性 Ginevra とは相思相愛の仲になり、学内での地位も一つの頂点を窺うところまで来た。Ledger の中で、大学 2 年次を総括する言葉の最後に“Ginevra—Triangle year.”<sup>(14)</sup>と記しているのは、全ての夢が今にも叶うかに見えた時の彼の思いを端的にあらわしたものであろう。

しかし、フィッツジェラルドの成功には、それを足元から崩してしまうような要因が始めから必然的に含まれていた。成績不振の故に *Fie! Fie! Fie!* の公演にはフィッツジェラルド自らは参加できなかったことが最初の

(13) Brucchooli は Ellis の不正行為を示唆する物証に加え、Edmund Wilson が回想記 *A Prelude* の中で Ellis のことを「鉄面皮のベテン師」と非難した事実を補強証拠として挙げている。私は念の為、Wilson の著した回想記の該当箇所 (p. 67) を読んでみて一驚した。Wilson は Ellis とは高校と大学を共にしたが、高校で Ellis が盗作したことを知り、更にプリンストン大学では、Wilson 自身が編集長である *Nassau Lit* に掲載した Ellis の受賞エッセイがやはり剽窃であったことを知り、憤るのである。しかし、「鉄面皮のベテン師」という非難の言葉は、Ellis の高校の時の盗作と卒業直後に彼がした演説の偽善性に向けられたものであって、フィッツジェラルドの業績を横取りしたこととは関係が無い。私が読んだ限りでは、Wilson の回想記の中に、Ellis によるフィッツジェラルドの業績横取りに関する記述は無い。大学者の言うことでも鵜呑みにせず原資料に当たることは、今更言うまでも無い学問の基本だが、その大切さを改めて実感した。

(14) *Ledger*, p. 169.

予兆であったと言うべきであるが、トライアングル・クラブに加え、更に、*Tiger*と*Nassau Lit*に寄稿を続けるという課外活動に熱中する余り、2年次後期末試験は最悪の結果となった。2年次を総括するフィッツジェラルド自身の言葉として上記引用した部分の前が“A year of tremendous rewards that toward the end overreached itself and ruined me”(大きな実りのある年であったが、無理がたたって最後に失敗し、自らを傷つけた)となっているのは、まさしくこのジレンマを述べたものである。結局これが尾を引き、3年次始めの追試験でも合格できず、フィッツジェラルドはクラブ役員になる資格を失い、トライアングル・クラブ会長になる道は閉ざされてしまった。*Tiger*への寄稿やプリンストン大学フットボール新応援歌のコンペに応募して(“A Cheer for Princeton”)優勝したりすることに僅かの慰めを見出すフィッツジェラルドであったが、追い討ちをかけるように、学業不振故の停学処分が12月に下される。

頂点寸前で転落してしまったこの時のフィッツジェラルドの衝撃と傷の深さは、既にBruccoliが指摘したことだが、<sup>(15)</sup> この時から20年も経た後にフィッツジェラルドが書いたエッセイ“Handle with Care”の中で苦渋と悔恨に満ちた筆致で回顧されていることから窺い知ることが出来る。<sup>(16)</sup> また、*Ledger*には、この停学処分にあった年を総括する言葉として次のように記されている。“A year of terrible disappointments + the end of all college dreams.”<sup>(17)</sup> 停学という事実は、トップ階層にのし上がりたいというフィッツジェラルドの成功の夢を根こそぎ粉砕してしまうものであったが故に、彼の生涯に互り消しがたい深刻な衝撃と精神的な外傷を与えたわけである。だからこそ、これを境にフィッツジェラルドの文学は一変し、主として軽妙な諧謔詩を寄稿していた*Tiger*から活動の場を真面目な文芸誌

---

(15) Bruccoli, *Some Sort of Epic Grandeur*, p. 67.

(16) *The Crack-Up*, ed. Edmund Wilson, p. 76. 左記においてはエッセイのタイトルが“Pasting It Together”となっているが、これは編者がフィッツジェラルドの二つのエッセイのタイトルを取り違えたことに起因する。

(17) *Ledger*, p. 170.

*Nassau Lit*に変えて本格的なストーリーを次から次へと発表し始めるとい  
う、Piper 及び Kuehl の考え方は説得力があり受け入れやすかった。しか  
し、Deffaa の編集したプリンストン時代フィッツジェラルド作品集におけ  
る事実の集積は Kuehl らの解釈を決して支持するものではない。数字を挙  
げよう。停学以前に *Nassau Lit* に掲載されたフィッツジェラルド作品は、  
戯曲“Shadow Laurels”と短編小説“The Ordeal”との2作のみである。そ  
れに対し、停学後復学し最終的に大学を去る1917年11月までに同誌に掲  
載されたフィッツジェラルド作品は短編5つを含む15作である。停学を  
経た後のフィッツジェラルドが *Nassau Lit* にストーリーを書くことに重き  
を置いたことは否定できない。では、停学後に *Nassau Lit* へのフィツ  
ジェラルドの寄稿がふえるのとは逆に、*Tiger* への寄稿は減ったのか。前述  
したように、*Tiger* に掲載されたフィッツジェラルド作品の殆どは無署名な  
ので、その場合には、フィッツジェラルドが自分の作品として scrapbook  
に保存していたもののみをカウントすることにし、*Tiger* 関係者の証言のみ  
に支えられているものは除外する。これで Deffaa 編にある作品を数える  
と、停学前は4作、停学後は何と32作になる。もし、*Tiger* 関係者の証言  
のみに支えられたものもカウントすれば、停学後の作品は更に多くなる。  
新しいデータに従えば、Piper や Kuehl によって唱えられた従来通説が  
もはや成り立たないことは明らかである。

フィッツジェラルドは元々、喜劇精神の旺盛な創作者として出発した。  
このことは、彼が Newman School 時代に書いた短編や、生まれ故郷セン  
ト・ポールのエリザベス劇団のために書いた4本の戯曲に紛れもなく認め  
ることが出来る。そうしたフィッツジェラルドの本来的な喜劇精神が、プ  
リンストン入学後はユーモア雑誌 *Tiger* という格好の場を得て、ウイット  
の利いた諧謔詩や風刺詩を産み出すことになるが、これが、停学という試  
練に遭って減少したり、ましてや消失したりするのではない。量的にも質  
的にも、彼の喜劇精神が発揮される作品は増え続けるのである。つまり、  
軽い喜劇風の娯楽文芸から、停学を契機に深刻・内省的な文学に軸足を移

したということではなく、軸足を2本にして、本来の喜劇精神を更に発展させる一方で、同時に作家の経験を内省的に探求するのによりふさわしい形式として、短編小説を本格的に表現媒体として試みるようになったと言うべきである。フィッツジェラルド文学における諸諳さと深刻さ、喜劇精神と悲劇的テーマ、これら相反するものが一つの作品の中に流れ込み溶け合っているところが、むしろ彼の後の傑作の真髄であり、彼の文学に一貫して見られる特徴なのである。プリンストン時代におけるフィッツジェラルド最大の試練は、彼の文学を軽から重、喜劇風から悲劇調へというように一方から他方へと変えたのではなく、その両方を更に発展させる形で彼の文学を豊かにし、まさしくフィッツジェラルド的な特質を醸成する契機になったのである。プリンストン時代におけるフィッツジェラルドのもう一つの大きな試練は *Ginevra* に対する失恋であるが、その直後に書かれて *Tiger* に掲載された“Undulations of an Undergraduate”(Deffaa, p.104) は彼女との関係も含め大学生活をユーモラスに表現した風刺詩であったことも上述の考えを補強するものだろう。

新しい資料を用いて Piper や Kuehl による従来解釈に反証を試みたが、プリンストン時代のフィッツジェラルド作品全てを通読しながら改めて痛感することは、フィッツジェラルド文学の、とりわけ *The Great Gatsby* の本質的要素の殆ど全てがプリンストン時代の作品に胚胎しているという考えを最初に打ち出した Kuehl の洞察の有効性である。一例を挙げよう。*The Great Gatsby* における Daisy と Gatsby の再会場面に出てくる有名な“there was no light save what the gleaming floor bounced in from the hall”(初版 p. 115) という文が *Tender Is the Night* の題辞にも使われた Keats の“Ode to a Nightingale” 38-9行に基づくということは既に知られているが、*Gatsby* より7年前に既に“Babes in the Woods”において近似した例のあることを私は今回発見した。ヒロインの Isabelle と相手の Kenneth Powers とが二人きりでひそまった部屋に隠れて愛を交わそうとする場面に次のような描

写がある。“Kenneth reached above their heads and turned out the electric light so that they were in the dark except for the glow from the red lamps that fell through the door from the music room.”<sup>(18)</sup> *Gatsby* においては上記引用個所に“Love Nest”という曲のピアノ演奏が続くが、“Babes in the Woods”においては作品名と同名の曲がピアノで奏される。曲名は異なるが両場面の状況は酷似している。*Gatsby* における再会場面ひとこまの一齣は“Babes in the Woods”上記引用個所を元にして構想されていたのである。私は今回こうした発見が出来たことに私なりに満足を感じるが、その発見にしても Kuehl の洞察の射程距離の中にあることを思う時、彼の先見の明の確かさに改めて感服したことを付け加えたい。実は、以上について Kuehl と意見を交わしたかったがそれが叶わなくなったことが残念である。<sup>(19)</sup>

(18) Deffaa, p. 117.

(19) 1996年にフィッツジェラルド生誕百年を記念してプリンス頓大学で国際フィッツジェラルド会議が開かれた時、John Kuehl は一つのセッションの司会を元氣そうに務めていた。2年後のアッシュヴァイルにおける同会議で彼の訃報が伝えられた。長年、心臓を患っていたということである。

## Bibliography

- Brucoli, Matthew J., and Jackson R. Bryer, editors. *F. Scott Fitzgerald: In His Own Time*. New York: Popular Library, 1971.
- Brucoli, Matthew J., with Scottie Fitzgerald Smith and Joan P. Kerr. *The Romantic Egoists*. New York: Charles Scribner's Sons, 1974.
- Brucoli, Matthew J. *F. Scott Fitzgerald: A Discriptive Bibliography*. Rev. ed. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1987.
- Brucoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. Rev. ed. New York: Carroll & Graf, 1993.
- Deffaa, Chip. ed. *F. Scott Fitzgerald: The Princeton Years Selected Writings 1914-1920*. Fort Bragg, Calif.: Cypress House Press, 1996.
- Fitzgerald, F. Scott. *F. Scott Fitzgerald's Ledger*. ed. Matthew J. Brucoli. Washington,

- D.C.: Brucoli Clark/ NCR Microcard Books, 1973.
- Fitzgerald, F. Scott. *F. Scott Fitzgerald's St. Paul's Plays*. ed. Alan Margolies. Princeton, N. J.: Princeton University Library, 1978.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Price Was High: The Last Uncollected Stories of F. Scott Fitzgerald*. ed. Matthew J. Brucoli. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1979.
- Fitzgerald, F. Scott. *Fi! Fie! Fi-Fi!*. ed. Matthew J. Brucoli. Columbia: University of South Carolina Press, 1996.
- Kuehl, John. ed. *The Apprentice Fiction of F. Scott Fitzgerald*. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 1965.
- Mizener, Arthur. ed. *Afternoon of an Author*. New York: Scribners, 1958.
- Wilson, Edmund. ed. *The Crack-Up*. New York: New Directions, 1945.
- Wilson, Edmund. *A Prelude: Landscapes, Characters and Conversations from the Earlier Years of My Life*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1967.

(英米文学科 教授)